
林圭介の奇妙な体験

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

林圭介の奇妙な体験

【Nコード】

N1406K

【作者名】

日野望美

【あらすじ】

考古学者である林圭介が遭遇した、奇妙で奇怪な体験についての物語。

それぞれの話には、それに絡む遺物の名前が付いています。圭介自身の特殊な生い立ちや特殊な能力が、彼を不可解な現象に巻き込んで行くようです。ちょっぴりだけ怖いホラーを目指します。

拙作「テーブルとベッド」の林教授が主人公です。その他の人物も登場予定です。

水晶髑髏・1（前書き）

直接的な描写は殆ど有りませんが、男性同士の同性愛に関する話題がかなり頻繁に出でてきます。

また、古代史や伝説に基づく、残酷な描写も有ります。

水晶髑髏・1

考古学者が主人公のハリウッド映画のシリーズでハデに取り上げられたりはしたが、

いわゆるクリスタル・スカルとか水晶髑髏すいしゅうぶくろと呼ばれるものは、

マヤともインカとも何の関係も無い真つ赤な偽物が大半で、明確な鑑定結果が公表されていないものも、

信憑性はゼロに等しい。

まともな考古学徒なら、そう考えるのが当たり前の話だ。

「世界には全部で十三個の水晶髑髏すいしゅうぶくろが存在し、全て集まれば世界が救われる」

「十三個全て集まると、生命と人類の謎に対する究極の回答を知ることができる」

久しぶりに飲みに行った新宿のバーで、そう力説する肥満体で禿頭の男に出くわした。

ネイティブアメリカン風のトルコ石と銀や皮を組み合わせたアクセサリー類をゴタゴタと身に着けている。太い指輪や、ナバホ族風の腕輪、切石細工の大きなハートのペンダント、幾本ものビースネツクレス、羽根型のピアス、いやはや凄い量だ。

いわゆるニューエイジかぶれだろうが、そのうち宇宙存在とかチャネリングとか言いそうだ。

バーテンダーでオーナーでもある遼二りょうじも正直辟易してきたのだろう。僕の方に話を振ってきた。

「圭ちゃん、お久しぶり！ねえ、圭ちゃんからすると水晶髑髏すいしゅうぶくろってどうなの？世界が救われちゃったりするもんなの？」

遼二りょうじは亡き養父のお気に入りだった。

「遼二のシェーカーを振る姿は、華が有る。作り出すカクテルも旨い」

と言つような事を幾度も聞かされた。

画家だった養父は、仕事場での遼二を幾度もスケッチしていた。結局は一つの作品としてまとまる事はなかったが、遺品を整理しているとかかなりの点数の下書きやスケッチが出てきた。

「まあ、学会でそんな話をする人は居ない。いわゆるトンデモ本は多いようだが、その水晶髑髏の発見例第一号と騒がれた『ヘッジスの水晶髑髏』って言うのが、マヤともアステカとも無関係な十九世紀以降に作られた物だつて言うスミソニアン研究所の鑑定結果は、まず正しいんじゃないかな」

「まあ、あなたは専門家の方かしら？」

肥満体の禿頭はゲジゲジ眉を吊り上げた。

「別に水晶髑髏の専門家では有りません」

「でも、圭ちゃんは考古学の教授ですよ。素人さんじゃないわ」

「近頃はトンデモ本だけ読んで、まともな入門書を何一つ読んでない状態で考古学をやりたいつて言う高校生もいるんだよね。困ったもんだ」

「そうはおつしゃいますけど、『ヘッジスの水晶髑髏』のプリズム効果は現在の技術でも再現できないですよ？その話は御存知？」

「あの髑髏の下から光を当てると眼窩に光が集中して目が光っているかのように見える、とか、太陽の光で七色に光るとかいった話なら、知ってますよ」

「あの目を一分以上見つめっていると、誰でも不思議な催眠状態に陥るのよ。御存知？」

「そう言う噂は聞きますが、現物は見てませんから、何とも言えません」

「私は見たのよ。今の持ち主の方から見せていただいたのよ。更に高度なスピリチュアル体験が出来たわ。近い内にあの素晴らしい水晶髑髏が日本にも来るのよ。ぜひあなたのような専門家の方にも御

覧頂いて、認識を改めていただきたいわ。これ、私の事務所です。御連絡お待ちしてますわ」

そついい残すと、彼は勘定を済ませて店を出て行った。

体に不似合いなオネエ言葉には、慣れているので嫌悪感はないが、あの一種独特な邪悪とも言って良い目の光と、奇妙なオーラと言うか雰囲気印象に残る。傍に寄らないほうが安全そうだ。

去り際に押し付けられた名刺には

「本当の自分を見つけましょう。真の魂研究所・所長・小鳥遊玲」と有った。

あの見た目で小鳥遊たかなしねえ。違和感が大きすぎる。ほとんど冗談のようだ。

「ねえ、あんなデブ専かハゲ専って言う感じで小鳥遊たかなしは無いと思わない？」

「全くだ」

遼二りょうじの出した「ナインティーンズ・ホール」を飲んだ。

ウイスキーとドライ・シエリーにスイート・ベルモットを同量シエイクする辛口のカクテルだ。

「ホット・サンドぐらい作るわよ。もう一時間もしたら客が押し寄せるでしょうけど」

「ああ、じゃあ、頂くよ」

遼二りょうじは鼻歌を歌いながら、ホット・サンドを作り始めた。

水晶閱讀・1（後書き）

さて、どうなるか、ホラーなんて初めてでして、まあ、がんばって
みます。

水晶髑髏・2（前書き）

圭介の所にも、一個来たようです。

水晶髑髏・2

新宿の遼^{りょう}二の店で飲んでから、十日ばかりたった日の事だった。
クルト・エーベルが「メキシコで手に入れた」という奇妙な品物を持ってきた。

メキシコへは、あの有名な国立の人類学博物館に何やら用事が有って出かけたらしい。恐らくアステカ研究の第一人者の許でぜひ教えるを請いたい何事かが有ったのだろう。

「でさ、先生が仰るには、贋作とされてきた水晶髑髏も、必ずしもそうとは言い切れないって事なんだよな」

「クルトは水晶髑髏の件でわざわざメキシコまで行ったのか？」

「いや、全然別件。でもないか。ラカンドン族の村に神話や伝説の採取に行くのが目的だった。最初に人類学博物館で先生方から御意見や御助言を頂こうと思ったわけさ」

マヤの末裔、ラカンドン族もかつてのようにジャングルの奥地に隠れ住んで居る訳でもない。ラカンドン族の有名なプロボクサーなども居る訳だし。という事は逆に言うと、彼らの文化の本来の形も忘れられ失われる危機に立っているわけだ。

クルト・エーベルはスイス人で語学の天才で、考古学・民族学・民俗学・社会学・人類学と言った学問の垣根を飛び越えて世界的な業績をあげている研究者だ。しかも現役の修道士で司祭。

最初はアメリカのとある大学で、人類学の研究室にお互い出入りしていた所から、親しくなった。

「君、日本人だよな。僕、今度、民俗学的な調査をしに日本で二年ばかり住む予定なんだけど、君が籍を置いている大学ってどこ？」
と言った具合に、きわめて流暢な日本語で話しかけてきたのだ。

生涯の研究テーマは「宗教」らしい。

日本に引きこもって、日本の考古学だけやっていると実感はわからないだろうが、考古学と人類学や社会学との距離は海外ではもっと近い。逆に日本以外の考古学に関わろうとすれば、そうした隣接する学問分野の知識や人脈が不可欠だ。

クルトは今は都内の幾つかのキリスト教系の大学や女子大で、民俗学や社会学、文化人類学の概論的な講座を持っている。

「考古学で何か有ったら、圭介の所に行くよ。資料も文献もそろってるみたいだしさ」と言って、何かあるとウチの大学の職員でも研究者でもないのに、勝手に色々やっていく。まあ、クルトほど様々な言語を使いこなせる人間もいないし、人脈も広いし、世話好きなので、いつその事、この夏のウチの大学院の集中講座を一つ持つてくれと頼むと、快く受けてくれた。

「これさあ、メキシコシティの朝市で手に入れたんだけど、色々と奇妙というか……」

「おい、これって……」

「だよなあ。復顔ふくがんしてみると、圭介みたいな顔になっちゃうと思うだろ？」

クルトも僕も、骨から人物の人種や特徴を読み取る必要を感じて、しばらく高名な法医学の教授の所にお世話になった経験がある。僕らの場合犯罪捜査がらみではなくて、考古学的な資料をより正確に確実に理解する必要を感じての事だった……

クルトが持ってきたアメジスト製の水晶髑髏こつこは拳程度の大きさだが、非常に精巧なつくりで、下顎が取り外せる。

「最近じゃ観光用以外めったに見ないラカンドン風の貫頭衣を着たお爺さんが、水晶類の小物の露店を出していて、そこにこの髑髏が

あつたんだ」

現在のメキシコシティーはアステカ帝国の都テノチティトランの廃墟の上に作られた都市だが、そのアステカ帝国成立よりも、ずっと以前の文明であるマヤ文明の担い手の子孫の一部が、ラカンドン族なわけだ……場所と、このまるで僕みたいな顔の水晶髑髏とは、関連も特別な意味も無いかもしれない。

ラカンドン族が多く暮らすチアパス州はメキシコでも有数の低所得州だから、首都で毛色が変わった出稼ぎをしても、おかしくは無い。まあ、反政府的な武装蜂起集団も存在するわけだが……

「お前さん、この髑髏の顔をした人を御存知だろう？」という感じで老人がいきなり話しかけたと言う。

クルトはてつきり、法外な値段を吹っかけて来ると思ったのに、タダで持って行けと言われたらしい。

「何で、また、タダで見ず知らずの外国人にこれを渡したんだろうな？」

「だよねえ」

「クルトがこの髑髏の顔をした僕を知っているから、渡したって事か？」

「言葉通りに受け止めると、そういう事になるけどねえ……」

それにしても、本当にまあ、僕の顔にそっくりだ。

制作年代、産地一切不明のアメジスト製の水晶髑髏は、とりあえず僕の研究室の棚に納められた。

「なあ、これはマヤの呪いかなんかなのか？」

「どうだろうねえ。そう悪いもんじゃないような気がするから圭介の所に持ってきたんだけどさ」

僕も、さほど悪いものでもないような気はした。

だが、この時は、この先の奇妙な出来事について、僕らは、まるで予想もしていなかったのだ。

水晶閱讀・3（前書き）

あの恵子が三年生の時の話、
ですね。

水晶髑髏・3

いきなり、凄まじい激痛が走る。ズン、ドガツ、ベシッ

「な、なんだ？うおおおっ！」

周りの風景が真っ赤に染まり、高い所から転げ落ちる、何処だ！ここは！

グジュルッ！ベリッ、メリメリメリ、バキッ！

先ほどより、もっと凄まじい痛みが全身を襲う……た、助けてくれ！

「先生、先生！林先生！」

耳元で叫ぶ女、若い女の声だ……あ、恵子ちゃんか。

僕のゼミの三年生、太田恵子ちゃんだ。

小柄だが頑張り屋で、研究熱心で、まっすぐに僕を慕ってくれる。

愛らしい高校生と見間違ふような風貌だが、これで一児の母だ。

見かけによらず肝が据わっていて、しっかりしている。

甲斐甲斐しく、僕の汗を拭ってくれて、助け起こしてくれた。

「先生、酷くうなされていらっしやいました、冷や汗までかいていらっしやって、どうされたんですか？」

どうやら、研究室のソファで昨夜、仮眠のつもりで眠ったら、朝になっっていたらしい。

「何だか首をちょん切られて、皮を剥がれる夢を見たみたいだ」

「マヤの遺跡の事でも調べていらっしやったんですか？」

恵子ちゃんに言われて気がついた。

マヤのピラミッドで奉げられた生贄は、心臓を抉り取られて、階段

から引きずり落とされ、皮膚をはがされる。両手両足を切り落とされ、スープにされて食べられてしまう物だったらしい。

まさにあの感じは、生贄にされた人物の感覚そのものだったのではないか？

「どうなさったんですか？その赤い跡は？」

恵子ちゃんは手鏡を差し出した。

あごのすぐ下に、前後ぐるっと一周した赤い線が走っている。

そして、手にも、足にも、同様の幾本かの線が走る。そして目も真っ赤だ。

「病院に、行けますか？」

「いや、恵子ちゃん、まず、その棚のアメジスト製の髑髏、取ってくれないか？」

「先生、これは？」

「クルトがメキシコから持ってきたものなんだが……」

「まっ……」

恵子ちゃんは絶句している。

「僕にそつくりの顔だろう？」

「一体何なのでしょうね。驚きました」

アメジストの髑髏に触れたとたん、ヒリヒリした痛みが治まった。

何らかの治療効果があるみたいだ。手足の赤くなった線に当てると、赤みが綺麗に消える。

恵子ちゃんに頼んで、首の後ろや背中の方も当ててもらおう。

「お肌の赤い部分は良くなっただけですが、何だか不気味ですね。そう言っただけでよこした髑髏の顔は、眼窩の部分が赤く変色し始めていた。」

「目に当てると、何か有るだろうか」

「危なくないでしょうか？」

「どうだろう？」

目に押し当てると、何かが僕の中に入り込んだ。いや、こういう言い方はおかしいかも知れない。

僕の脳内の意識していなかった回路が活性化した？そんな感じた。

「先生?!」

「どうした？」

「これは一体なんでしょうか？」

アメジストの髑髏の中で、何かが光っている。

上顎と下顎を分けると、その光がいきなり僕の口の中に飛び込んだ。

「大丈夫ですか!先生!」

「一瞬めまいがしたけれど、大丈夫みたいだ」

「これって、超常現象でしょうか?霊的現象でしょうか?それとも怪奇現象？」

「解らないけれど、僕ってこういう変な現象には事欠かないよなあ」

「でも、私の伺っている限りでは、困った事は特に無いってお話でしたよね」

「それはそうなんだが……」

「線路に踏みつけにされた古代の天皇らしき人に呼ばれたり、甕棺の中身の人に気に入られたり、貝塚に埋まっていた人に助けを求められた、ぐらいでした？」

「学会でそんな話をする、頭がおかしいと思われるから、めったな事では口には出来ないけどね。それにしても、海外の方は今回が初めてだけだな」

「エーベル先生が何か力を貸して下さるんじゃないでしょうか?だって、これを持ち込んだ責任取っていただかなくてはいけませんでしょう?」

なるほどね。恵子ちゃんの言うとおりかもしれない、と、僕は思った。

水晶髑髏・4

恵子ちゃんが購買でパンを買ってきてくれて、コーヒーを淹れてくれた。

一年生の頃から気が利く子だったが、このごろは痒い所に手が届くというか、実に行き届いている。

「昨夜も余りちゃんと召し上がっていないんじゃないですか？先生がお好きな購買の卵サンドと焼きたてのクロワッサンです。家から持参した林檎も剥きましたから、召し上がってください」
何だか母親みたいだ。

そうこうする内に、クルトがひょっこり顔を出した。

「やあ、圭介、それ君の朝食？旨そうなクロワッサンだね」
「どうぞ」

恵子ちゃんはクロワッサンとコーヒーをクルトに出した。

「良いの？貰って。これ、恵子ちゃんの分じゃない？」

「購買のおばさんが、サービスで一個おまけしてくれた分です。どうぞ遠慮なく」

クルトは修道士会の宿舎で朝早く、しっかりと朝食を取って来るくせに、旨そうな物があるとすぐにパクつく。僕の齧りかけでも何でも、気に入るとお構いなしに食べてしまうので、要注意だ。まあ、構わないと言えば構わないのだが……今朝は恵子ちゃんが居るので、さすがに人の分まで食べる程あつかましくなれないだろう。

恵子ちゃんはクルトを「国際的な学者」で「語学の大天才」で「素敵な神父様」だと思って、せっかく尊敬してるのに、僕の齧りかけをパクついたりしたら大きなイメージダウンになるはずだ。

「エーベル先生がお持ちになったアメジストの髑髏、変な感じに光ったり、眼窩の部分が赤く色が変わったり、色々と薄気味悪いです。

さつきは上顎と下顎の間から飛び出した光が、林先生の口に飛び込むし……」

「やっぱり、この髑髏のモデルの人と圭介が縁が有るって事じゃないの？そうそう、昨日まで探しても見つからなかったんだけど、今朝ひよっこり見つかったんだよ。この黒曜石のナイフ。これもメキシコシティーの謎のおじいさんから、髑髏と一緒に貰ったんだ」

「おいおい、どう見たって生け贄用のナイフじゃないか」

「だよね。僕さ、これを手にした時、血塗れのチャックモールが一瞬見えた気がした」

チャックモールとは死んだ戦士を象徴する人物像で、上に人身御供の心臓を置いたりする入れ物を抱えている。メキシコの割合と北の方が起源らしいが、ホンジュラスあたりまで分布している。

「この髑髏と関係がやっぱり有るのかな？」

「圭介が持ってみたなら、もっと凄いものが見えたりして」

「さっきのへんてこな光と言い、色々と因縁がありそうですね」

一人の時に持つより、今持って見たほうが良いかもしれない。こわごとと触ってみると……

「先生！どうされました！」

「圭介、何が見えたの？」

血塗れの男がナイフを持ってくねくね踊る姿が見える。ジャガーの毛皮を着ていた様だ。

テスカトリポカ…生命を与え、奪う戦士の神、ジャガーで象徴される。そうか。

「ジャガーの毛皮を纏った踊る男」

「テスカトリポカの神官で事だねえ。黒曜石のナイフも象徴の一つか。制御不能の大きな力の象徴でもあったつけ」クルトは次々イメージが思い浮かんだようだ。

「となると、この髑髏とナイフは、何処で如何結びつくんですか？」

そのとき、珍しい事に新宿の遼二りょうじから電話がかかってきた。

「ああ、ごめんなさい、職場にかけちゃって」

「こんな午前中の時間帯に一体如何したんだい？」

「ホラ、あの奇妙なお客さん、小鳥遊たかなしさんが、ウチの店のHPに変てこな画像を送りつけてきたのよ。『わかる方にはわかります』とか言うメッセージをつけて……。お客様のお便りコーナーのトップに上げておくから、圭ちゃん、見てやってくれない？水晶製の髑髏むくろが大量に棚に並んでいるのよ。なんか不気味。今晚やってくる気らしいんだけど、イヤーな予感がするの」

遼二の店のHPはお気に入りに入れてあるが、そのコーナーは見た事が無かった。

「ああ、この画像か」

「うへっ、凄い数の水晶髑髏むくろだね。びっしり棚に並んでる」

「ツオンパントリって言いましたか？髑髏むくろがドッサリ並んでましたよね」

恵子ちゃんはなかなかの勉強家だ。

「アレは、アステカじゃなくてマヤの遺跡なわけだが、でも、チャックモールはあそこも有ったよな」

「うん。有った」

クルトも画像を見て考え込んでいる。クルトの場合はカルトや新興宗教についても研究しているから、そういった方面からの分析も出来るのかもしれない。

遼二に電話をかけ直してやる。

「うん、そうなんだ。生贄なげとなった戦士の魂が天に旅だつ場所をあらわしているらしい。ああ、わかった。今夜、店の方に顔を出すよ。小鳥遊たかなしって人が来たら、すぐ教えてくれ」

「何か、危険なカルトの匂いがするなあ。メソアメリカの古代宗教

と結びつけて教義を確立しようと言うグループなんだろうかねえ」
僕はクルトにも一緒に店に行ってくれるように頼んだ。恵子ちゃんも一緒に来たがったか、場所が場所だけに、女の子はまじいだろう。危険だからダメだと僕が言くと、ちょっぴり涙目になって、
「先生方も十分お気をつけて」と言った。

事実、結構危険なのかもしれない。あの水晶髑髏の数の凄まじさは普通じゃない。小鳥遊^{たかなし}という男が一体何をたくらんでいるのか、まだ、先が見えてはこないが、どの道まともじゃないのは確かだ。

水晶髑髏・4（後書き）

誤字、4箇所訂正しました。他にもあったら教えてください！

水晶髑髏・5（前書き）

これから何かが起こりそう？

水晶髑髏・5

遼二の店は、まだ混雑してはいなかった。

「午後七時きっかりに小鳥遊^{たかなし}さん、来るらしいわ」

アメジスト製の髑髏と黒曜石の生贄ナイフを遼二に見せると、

「なーにーこの、恐ろしいお土産は。そちらのクルトさんのメキシコ土産なの？イケメンなのにあぶない人なのね」などと言う。

「でもねえ、遼二さん、この髑髏の顔に肉と皮膚を足してみたら圭介そっくりの顔になるんですよ。法医学^{ふくがん}なんかで言う復顔^{ふくがん}って事になります」

「へええ、髑髏からハンサムか不細工までわかるわけなの？」

「ええ、わかりますよ。水晶でこれだけかつちり特定の人間の顔を作り出したケースも珍しいでしょうね。ましてや、よく知っている人間の顔となると、気になっちゃいます。確かに変なおじいさんが売ってたんですけどね。ただでくれるって言うから、つい受け取っちゃいました」

クルトと遼二は初めて会ったばかりだが、何気になじんでいる。遼二は「綺麗な男は全部好き」だからな。クルトは遼二の出したホットサンドの味が酷く気に入ったようだし。

「さつき、その髑髏おかしな光は出すし、凄まじく痛い夢は見るし、その光が僕の口に飛び込んでめまいを起こすし、ナイフの方も血まみれの生贄の儀式的様子が見えるし、色々変なんだ」

「僕は髑髏の方は触っても何にも感じないんです。髑髏は圭介専用かな？ナイフの方は結構グロテスクな場面が見えちゃいますが。遼二さんはどうでしょうね？」

「ええ？なんか薄気味悪い」

遼二は気味悪がりながらも、興味は有るみたいだ。

「クルトがそんな風に言うけれど、遼二は触らない方が良いかもな。人間の皮をはぐ場面なんて、胸糞悪いだろう?」

「触った後、体の調子が変わったりはしないの?」

「髑髏に触れて不気味な夢を見て苦しがつていたのは圭介だけみたいで、僕も、圭介の弟子の恵子ちゃんも平気。痛い夢のあと、髑髏でさすると、痛みが引いたらしいから、悪い事ばかりでも無いらしいです。でも、ナイフはどうなのかな」

「やっぱり、さわっちゃお!」

「おいおい、大丈夫か?」

「髑髏は平気みたいね。ナイフは…!? 何こいつ!」

「毛皮を巻きつけた血まみれのおっさんが見えた?」

「そうそう。毛皮を巻きつけてたわ。でもって、くねくね踊ってる。ド変態ね」

「テスカトリポカって言う神に仕える神官らしい。儀式の一場面だと思うよ」

「でも、確かに遼二さんが言うように、ド変態かも知れないと僕も思う」

クルトはそう言いながら、オンザロックをグイッと飲んだ。

「儀式とは言え、心臓を抉り出して、踊るって、やっぱり変態かもしれない」

「何でナイフを手にとると姿を見せるのかしらねえ。死んでも目立ちたがりやで、変態みたいね」

「ナイフの変態神官と、この髑髏だけど、圭介はどう関連付ける?」

「無関係だったりしたら、笑うなあ。有りえるが」

「メキシコで受け取った時のおじいさんの様子では、やっぱり関係有りそうだけどなあ」

「圭ちゃんみたいな髑髏のモデルの人が、変態神官に殺されちゃったとか?」

「神官の顔は圭介とは随分違う顔だったみたいだね」

「本当に、この二つは制作年代もできた場所も一緒だって保証は無いじゃないか。どっちもオカルトめいた薄気味悪い代物だけど、直接結びつける根拠は希薄だもんな。でも、関係が有った方が面白いけどな」

「面白いか。なんか圭介らしい」

「圭ちゃんて、昔からオカルト的なアンテナって敏感よね。関係有りそうなのは？」

「気がするというより、そうだと面白いという感じしかないが……」

三人とも思わず沈黙して、髑髏を見つめた。又光っている。

壁にかけられた少女趣味っぽいオルゴール時計が七時を知らせた。すると、店のドアが開いて、あの小鳥遊が店に入ってきた。

「あら、皆様おそろいで。こちらは、クルト・エーベル先生かしら？」

キンキン響く独特の声。

「まあまあ、素晴らしいアメジストの髑髏ねえ」

こいつを如何にかしなくちゃいかん。如何にかって何をどうするんだ？

僕の頭の中に他人の感情、感覚が入り込んで勝手に暴れている感じだ。

これは、あのアメジストの髑髏のモデルの感情か？

「ちょっと、圭ちゃん！顔が真っ青！」

「その髑髏を当ててくれ、それで朝、一度苦しいのが治まった」

「こっかしら？」

遼二に額に押し当ててもらつと、嘘のように楽になった。その様子をクルトはじっと観察している。

「まあああ！すばらしいわ！大変なヒーリング効果ですね！」
是非、これを持って自分の事務所に来てくれ、と小鳥遊が騒ぎ始める。

「圭介、行つて見るかい？」

クルトは行く気、満々なようだ。遼二は悩んでいたが、店も有るし、オカルト的なパワーが特に有る方じゃ無いので、残る事になった。アメジストの髑髏と黒曜石のナイフを、それぞれ別の箱に納めて持っていくことにする。ナイフに素手で触らなければ、あの血まみれ神官のヴィジョンは見えないのだ。

「こちらのお店から、歩いてせいぜい六、七分と言った距離ですの小鳥遊は御機嫌だ。何かこれから、大変な事が有るかもしれない。漠然とそんな気がする。

クルトはふらつく僕に肩を貸した。ああ、こいつがいれば、多分大丈夫。

何の根拠も無く、僕はクルトのガツシリした肩の感触に奇妙なほどの安堵感を覚えた。

水晶閱讀・6（前書き）

小鳥遊は、何をする気なのか？

水晶髑髏・6

やけに幅が無くて細くて、エレベーターもついていない老朽化した雑居ビルの五階に「真の魂研究所」と言う看板をかけた小鳥遊たかなしのオフィスと言うか、部屋は有った。

中に入ると、結構掃除は行き届いていて、新品らしい花柄のスリッパを出された。

「ホラホラ、ごらん遊ばせ！『ヘッジスの水晶髑髏』の本物ですよ、素晴らしいでしょう？」

通された部屋は六畳程度の床にグレーのカーペットを敷きこんだ部屋だった。

うつつ、やつぱり。PCで見たとおりの異様な有様だ。壁面一杯の棚を埋め尽くす勢いの水晶髑髏の群れと言うのか、何と言うのか、実に鬱陶しい。

一番大きいのが、一個だけ、テーブルの上に置かれている。確かに見た目は本物っぽいが、俄かには信じられない。

クルトはいつも出かけるときに肩から提げているバッグから、アメジスト製の髑髏と黒曜石製の生贄用ナイフを取り出して、テーブルに置いた。

「ものすごい数の水晶髑髏ですね。ご自分のコレクションですか？」
僕が聞いても、小鳥遊は上の空みたいで、うつとりした目つきでアメジスト製のコイツを見ている。

「ええ、この子達お友達が沢山欲しいみたいなの。色々な所で見かけたら、なるべく沢山買うようにしてきたけれど、この紫の子みたいにステキな子は初めて」

「結構色々な所で売っていますか？」

「そうねえ、日本では余り見ないわ。趣味で作っていらっしゃる方

は存じ上げているけれど。外国から来た子達が多いのよ。ねえ、この子触って宜しい？」

「ど、どうぞ」

目が泳いでいる。到底正気とは思えない。こんな狭苦しい部屋に山のような水晶髑髏を置いていては、どこかおかしくなって当然とは思うが、「この子」呼ばわりは中々に薄気味悪い。

「ねえ、圭介、どうやらカルト宗教の線は無さそうだね」

こっそりとクルトが耳打ちしたように、確かに何かの教義を打ち立てると言う雰囲気は無い。見渡した所、うんざりするほどの水晶髑髏以外カルトに有りがちな教義にまつわる絵や書物の類も無いようだ。

「小鳥遊さんは、こちらでどんな事をなさっているのですか？割合と新しい水晶髑髏が多いようですが、何らかのヒーリング効果の恩恵でも蒙っておられるのでしょうか？」

ニューエイジ系のグループの中には水晶を特別視するものも有るように聞く。

「私はこの子たちの力を使って、魂のゆがみを直しているのよ。素晴らしいでしょう？このクリスタルな波動！特にこの紫の子は素晴らしいパワーだわ。ねえ、この子、譲ってくださいらないかしら？」

僕とクルトが答えあぐねていると、小鳥遊は、ナイフを見て

「こちらはなーに？黒曜石のようだけど」

「生贄にした人間の心臓を取り出したりするのに使ったらしい神官の儀式用のナイフです」

「ナニナニナニーーー！びりびり来るわよ！」

小鳥遊は、ナイフをつかんだ。

奇声を発して、小鳥遊がナイフを水晶髑髏がドッサリ有る棚に向かって振り回すと、

バチン！バチン！バチン！

弾ける様な音を立てて、水晶髑髏が一つ一つ破裂する。それも白い粉末状に細かく砕け散るのだ。

「きゃほほほほ！」

奇声を発してくねくねと腰を揺らめかせて踊る。

「ねえ、あれってナイフをつかむと見えてくる神官の動きにそっくりだね」

確かに、ナイフの神官はガツシリした引き締まった体つきで、小鳥遊はぶよぶよした肥満体と言う差は有るが、動き自体は忠実に再現されている。

「それにしても、止めなくて良いのかな？」

「そうだな。どうしたものだろう」

自分で集めた水晶髑髏のコレクションを、ナイフの波動が何かかわらない力で粉碎し続けているが、どうすれば止まるものやら。

奇声を発して腰を振りナイフを振りかざす肥満体の男を見ながら、僕もクルトも考えあぐねていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406k/>

林圭介の奇妙な体験

2010年10月9日13時35分発行